

国立国会図書館国際子ども図書館シンポジウム  
絵本の黄金時代 1920～1930 年代：アメリカとソビエトを中心に

絵本作りににおける芸術のかたち：1920～1930 年代のアメリカ絵本

平成 22 年 11 月 27 日  
講師：レナード・マーカス

### 第一次世界大戦後のアメリカ

アメリカで絵本が成熟の時代を迎えたのは、第一次世界大戦の後でした。アメリカはその当時の経済的、軍事的な発展に誇りを持ち、1920 年代のアメリカ人は、文化面でも国のアイデンティティーを確立する時期である、と信じるようになりました。そして自国の作家、画家の手による非常に品質の高い絵本を子どもたちに提供しようと試みました。それは国を挙げての動きでした。同様の情熱が、例えばアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway)、F. スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald)、舞踏家のマーサ・グラハム (Martha Graham)、作曲家のアロン・コプランド (Aaron Copeland) やチャールズ・アイヴズ (Charles Ives)、そして摩天楼が立ち並ぶ現代アメリカの都市の建築家たちの創造性にも火を着けた、と言えます。

### 児童サービス草創期の図書館員

子どもの本の場合、これまでになく芸術革新の予兆が、実は戦前から起きていました。19 世紀終わりのアメリカの図書館員は、子どもたちの読書の要求に応えるのが図書館の使命なのかどうかを激しく議論しました。一部の図書館員はそれを面倒と感じ、図書館の正面玄関に「犬、子どもお断り」という看板を

出しました。しかし、20 世紀になると、子どもたちにサービスを提供するのが図書館の価値ある仕事だと信じる人たちの考えが勝り、「子どもの仕事」の地位が向上し、特に女性にふさわしい仕事だと見なされるようになりました。

#### (スライド)

これは、キャロライン・M. ヒューインズ (Caroline M. Hewins) です。コネチカット州ハートフォードにある公共図書館 (Hartford Public Library) の図書館員でした。1875 年の写真です。彼女は、児童サービスということを最初に強調したアメリカの図書館員の一人です。

#### (スライド)

これはニューヨーク公共図書館 (New York Public Library) です。42 番街にあります。全米の図書館のお手本となった図書館です。

#### (スライド)

これは、アン・キャロル・ムーア (Anne Carroll Moore) です。彼女は 1906 年にニューヨーク公共図書館に勤め始め、1940 年までそこにいました。彼女は子どもに対するサービスとはどういうものかを考え、モデル化し

ました。それまで、そういう考え方が存在しなかったからです。

## 出版社の児童書部門の創設

いったん図書館のコミュニティーが歴史的なステップを踏み出すと、出版社は、図書館が児童書にとって新しい市場であるとすぐに気付きました。そして、自ら専門家を雇い、どのような絵本が最も需要が高いか図書館員と相談しながら考えることの利点にも気付きました。

### (スライド)

1919年、当時米国で最大の出版社だったマクミラン社 (Macmillan Company) が、世界で初めて児童書部門を設置しました。これはマクミラン社本社の写真です。

### (スライド)

この女性がマクミラン社の最初の児童書の編集者です。つまり米国初の児童書編集者と言えるかもしれません。ルイズ・シーマン・ベクテル (Louise Seaman Bechtel) です。1925年、彼女はラジオで子どもたちに読み聞かせをしています。当時はラジオが非常に新しいもので (今のインターネットのようなものでした)、最新の技術を使って子どもたちに読み聞かせをしていました。

ダブルデイ (Doubleday)、パトナム (Putnam)、ダットン (Dutton)、ハーコート・ブレイス (Harcourt Brace) など、その他の出版社もマクミラン社に追随し、速やかに成功を収めました。

驚くには当たりませんが、新たに児童書編

集者となった人の多くは元図書館員でした。図書館員と編集者の間に育まれた関係は、商業的というよりも仲間同士のような共生的なものでした。この二つのグループは共通の理想と共通の目的を持ったパートナーとして活動しました。そして、子どもの読み書き能力を育て、ロバート・ルイス・ステイブソン (Robert Louis Stevenson) が「選りすぐり」と表現した本のみを子どもたちに読ませるべきだと主張することによって、一緒にアメリカと世界をよりよい場所にしようと決意していました。

## 児童図書週間の開催

### (スライド)

そして1919年、親に対して子どもの読書の重要性を訴える「児童図書週間」 (Children's Book Week) が初めてアメリカで開催されました。これは、その当時のポスターです。このとき絵を描いたのは、ジェシー・ウィルコックス・スミス (Jessie Willcox Smith) という有名なイラストレーターでした。 *Good housekeeping* (「グッドハウスキーピング」) という、その当時非常に人気の高かった雑誌の表紙の絵を描いていたのがジェシー・ウィルコックス・スミスでした。その彼女が「児童図書週間」のポスターを描きました。

## ニューベリー賞の創設

そして2年後、全米図書館協会 (American Library Association) がニューベリー賞 (Newbery Medal) を創設しました。これは、アメリカの主要な作家に子ども向けの作品を書くよう奨励すると同時に、親たちが本を買

うときの指針となるように、という目的で創設されました。初めてニューベリー賞を受賞したのが、*The story of mankind* (人間の歴史の物語) という作品で、「絵本の黄金時代」展でも見ることができます。

### 「ホーンブック」誌の創刊

1924年、*Horn Book* (ホーンブック) が登場しました。実は『ホーンブック』誌は、まだ存在しています。元々はボストンの書店のニューズレターから始まりました。子どもたちに理想的な本を提供する目的で、家族のための推薦図書リストを提供するようなニューズレターでした。それが全国紙となったのが『ホーンブック』誌です。

こうした発展がそれぞれを補強し合い、アメリカの児童文学を芸術の域まで高めようとする専門家のグループを育て上げたのです。

### ニューヨーク公共図書館の影響力

アメリカの出版の中心地であるニューヨークにあるニューヨーク公共図書館は、当然ながら文学の基準を設定するリーダー的な役割を担うようになりました。1906年にニューヨーク公共図書館の初代児童部長として就任したのが、アン・キャロル・ムーアです。彼女は直ちに全国的な有名人になりました。彼女は講演をし、新聞にコラムを寄稿し、選考委員会の委員長を務め、推薦図書リストを作り、挿絵の展示会を催し、編集者に助言をしました。

(スライド)

彼女は *New York Herald Tribune* (ニュ

ーヨーク・ヘラルド・トリビューン) という、その当時有名だった新聞記事にコラムを提供していました。彼女のコラムのロゴになっていたのがこの三羽のフクロウです。一番右側にいる、一番疑わしい顔をしているフクロウが彼女だと言われています。

彼女がしたもう一つの画期的なことは、図書館の入館年齢を14歳から7歳に引き下げたことです。全米の公共図書館の多くが彼女の手本に倣いました。

### アメリカ独自の絵本の誕生

図書館員や出版社の努力が実るまで、それほど時間は掛かりませんでした。批評家たちは、C.B. フォールズ (C.B. Falls) の *ABC book* (ABCのほん)、M. クラーク (Margery Clark) 作、モード・ピーターシャム、ミシユカ・ピーターシャム (Maud and Miska Petersham) 絵の *The poppy seed cakes* (けしつぶクッキー)、ワンダ・ガアグ (Wanda Gág) の *Millions of cats* (100まんびきのねこ) といった作品を、生粋のアメリカの傑作で、イギリスのビアトリクス・ポター (Beatrix Potter)、ウィリアム・ニコルソン (William Nicholson)、レズリー・ブルック (Leslie Brooke) の絵本に肩を並べるものだ、と賞賛しました。

### 芸術を志した画家たちの絵本

(スライド)

これは『100まんびきのねこ』の画像です。

(スライド)

これは、ワンダ・ガアグが初めてニューヨ

ークに来たときに描いたリトグラフです。彼女が絵本の挿絵を描くようになる前のものです。

(スライド)

これはビアトリクス・ポターの『ピーターラビット』です。

(スライド)

これはポター自身です。彼女は後年、アン・キャロル・ムーアの友人となりました。

(スライド)

これはウィリアム・ニコルソンの *Clever Bill* (かしこいビル)。

(スライド)

これはレズリー・ブルック。彼もイギリス人の画家で、アン・キャロル・ムーアと親しい関係にありました。

ワンダ・ガアグと C.B.フォールズは、二人とも非常に情熱的な児童書の編集者に偶然出会うことによって、元々の職業から絵本の道へ進むようになりました。若手の作家が最初から絵本の道に進むようになったのは何十年も後のことで、当時はそのようなことはありませんでした。その当時は偶然の出会いが非常に重要でした。

(スライド)

例えば、ルドウィッヒ・ベームルマンズ (Ludwig Bemelmans)、イングリ&エドガー・パリン・ドーレア (Ingri and Edgar Parin D'Aulaire)、ロバート・マックロスキー

(Robert McCloskey)、クレメント・ハード (Clement Hurd) といった人たちも、元々は絵本の作家ではありませんでした。

(スライド)

ロバート・マックロスキーはアメリカ生まれの画家で、子どもの絵本の挿絵を専門とする前は、お国言葉を駆使して目に見えるように物語を語る”American Scene” (アメリカの光景) と言われる方法に親しんでいました。これは、1939年に彼が初めて描いた挿絵です。彼自身の経験に基づくものです。アメリカの小さな町の絵です。

(スライド)

彼が若い芸術家として活躍していたときには、飛行機はほとんどありませんでした。1940年、*Life* (ライフ) 誌はパイロットを派遣し、アメリカ上空から写真を撮りました。これが1940年です。

(スライド)

1941年、ロバート・マックロスキーが同じことをしました。子どものために、同じように鳥瞰図ちょうかんず的な絵を描いたのです。

(スライド)

これは彼のスケッチの一つです。 *Make way for ducklings* (かもさんおとおり) です。

(スライド)

これはアメリカの水彩画を描いていた画家、ジョン・スローン (John Sloan) の絵です。

## (スライド)

その当時出てきた漫画本です。こちらはマックロスキーの挿絵に登場した漫画本です。彼はここでちょっと皮肉を言っています。この小さな男の子は漫画を読んでいる子たちに背を向けています。マックロスキーは、「漫画は余りよい本ではない。質の高い本は図書館で見付けるものだ」と訴えているわけです。彼は亡くなる前に日本を訪れています。

## (スライド)

これがボストンにある『かもさんおとおり』の像です。ボストンの観光名所の一つとなっています。

ジェームズ・ドーハーティ (James Henry Daugherty) は *Andy and the lion* (アンディとらいおん) の作者です。

ペギー・ベーコン (Peggy Bacon) は、元々、版画家と画家でした。マックロスキーやドーハーティと同じような作風で、同じようにアメリカの地方の生活の特質と、小さいながらも印象的な細部を表現しています。そしてアメリカの個人主義と自由への愛をたたえました。

マックロスキー自身は元々、壁画と水彩画のキャリアを進もうと思っていましたが、メイ・マッシー (May Masee) という、Viking Press (バイキング・プレス) の偉大な編集者に会い、彼の人生は変わりました。彼はこのような大型絵本を描くようになり、その中で壁画のようなドラマ性と壮大性を、寝る前に読み聞かせたり図書館で読み聞かせたりするのにふさわしい素朴なお話の親しみやすさと組み合わせ、アメリカの子どもや家族の生

活について、忘れがたいイメージを作り出したことにより、彼のほとんどの作品が図書館員の与える賞を受賞しました。

## 外国から来た絵本と絵本画家たち

アメリカの図書館員がアメリカ生まれの絵本作家を追い求める一方で、海外、特に北ヨーロッパの絵本を特に評価し、購入し続けたのは評価すべきことです。1920年代から1930年代にかけて、豊富な蔵書を持つ公共図書館の子ども室には、素晴らしい英語圏の画家の作品だけではなく、フランスのモーリス・ブーテ・ド・モンヴェル (Maurice Boutet de Monvel)、スウェーデンのエルサ・ベスコフ (Elsa Beskow)、ドイツのハインリッヒ・ホフマン (Heinrich Hoffmann)、動く本やポップアップの本で有名なロタル・メグゲンドルファー (Lothar Meggendorfer)、ウィルヘルム・ブッシュ (Wilhelm Busch) などの絵本もありました。ここに、モーリス・ブーテ・ド・モンヴェルの *Jeanne d'Arc* (ジャンヌ・ダルク) とハインリッヒ・ホフマンの *Der Struwwelpeter* (もじゃもじゃペーター) の本があります。

さらに、ニューヨークが政治難民やその他の移民の受け入れに果たしてきた歴史的役割も、アメリカの絵本の芸術性に大いに貢献しました。戦争や個人的な理由で、多くのヨーロッパの芸術家たちが祖国を逃れてアメリカに渡り、アメリカの画家の仲間入りをしました。「アメリカ絵本」という言葉には、より幅広い創造的、文化的影響が含まれるようになりました。

1912年にミシュカ・ピーターシャムはハンガリーを離れてアメリカに渡り、間もなく、

将来の妻であり協力者になるモード・フラー (Maud Fuller) に出会います。

#### (スライド)

ウクライナ生まれのボリス・アーチバシェフ (Boris Artzybasheff) は 1919 年にニューヨークに渡りました。これは彼の素晴らしい本、*Seven Simeons: a Russian tale* (七人のシメオン: ロシア民話) の表紙で、「絵本の黄金時代」展にも出ています。彼は長い間製作を続け、『タイム』誌の表紙を飾る画家として知られると同時に、洗練され活力あふれる『七人のシメオン: ロシア民話』のような作風で、子どもの本の画家としても名声を得ました。

同じくハンガリー出身の作家、画家であったケイト・セレディー (Kate Seredy) も、1921 年にニューヨーク郊外に住み始めました。

ロジャー・デュボアザン (Roger Duvoisin) はニューヨークを目指して 1927 年にスイスを去りました。

同じ年、エズフィール・スロボドキーナ (Esphyr Slobodkina) という、ロシアの抽象画家で後に挿絵も描くようになる人物が満州を経由してニューヨークに到着し、ドイツ生まれの画家であるクルト・ヴィーゼ (Kurt Wiese) は、ニューヨーク近くのニュージャージー州に根を降ろしました。1930 年代後半には、スロボドキーナは作家で編集者でもあるマーガレット・ワイズ・ブラウン (Margaret Wise Brown) に会い、彼女とともにアメリカで初めてのカラー絵本、*The little fireman* のような、その 10 年で最も絵画的に印象的な絵本を作りました。ここでは残念

ながらお見せする写真がないのですが。

#### (スライド)

これがマーガレット・ワイズ・ブラウンの若いときの写真です。

ドイツ生まれの作家、エドガー・パリン・ドーレアとノルウェー出身の妻、イングリ・ドーレアは 1929 年にヨーロッパを去り、ニューヨークに到着しました。

オーストリア貴族のルネ・ダーノンコート (René d'Harnoncourt) は、メキシコ経由で 1933 年にニューヨークに来ました。「絵本の黄金時代」展にも展示されているエリザベス・モロー (Elizabeth Morrow) 作の *The painted pig* (豚の貯金箱) や、自分自身の作品である *The hole in the wall* の画家として評判を高めていきました。ルネ・ダーノンコートは、後に、ニューヨーク近代美術館 (Museum of Modern Art) の館長として、ますます著名な人物となっていきました。

この時代に移民してきた画家のリストを作ったら、非常に長いものになるでしょう。

### 大恐慌とその後の発展

このような活況のなかで襲った大恐慌は、アメリカの出版社の児童文学出版への新たな関与の度合いを試すきっかけとなりました。出版社の中には、経済状況への恐怖心によって、あるいはこの分野に対する元々あった根深いためらいによって、児童・若者部門を縮小したり完全に閉鎖したりするところもありました。その他の出版社はより長期的な視野を持ち、早いところでは 1935 年に何社かの出版社が児童書部門の事業を拡大し始めまし

た。

ウィリアム・ペネ・デュボア (William Pène Du Bois)、マージョリー・フラック (Marjorie Flack)、マリー・ホール・エッツ (Marie Hall Ets)、ロバート・ローソン (Robert Lawson) といった多くの才能ある人々が絵本の分野で力を発揮するようになりました。

#### (スライド)

この写真ではロバート・ローソンが左、編集者のメイ・マッシーがデスクに座っています。そして *The story of Ferdinand* (はなのすきなうし) の作者、マンロー・リーフ (Munro Leaf) が『はなのすきなうし』の人形の前で座っています。

そしてもう一人、お名前を申し上げたいのが、バージニア・リー・バートン (Virginia Lee Burton) です。これら全員が同じ時期に、それぞれの創作活動をしていました。

### コルデコット賞の創設

こういった状況に鼓舞されて、全米図書館協会はニューベリー賞を補うものとして1937年に新たな絵本絵画の賞を創設しました。翌年、D.P. ラスロップ (Dorothy P. Lathrop) が *Animals of the Bible : a picture book* (聖書の動物) で最初のコルデコット賞 (Randolph Caldecott Medal) を受賞しました。この本は聖書からの短い引用を集めたもので、自然界を描くラスロップの才能が充分に発揮されたものでした。

### 漫画本の台頭と次世代の絵本作家

1930年代が終わる頃には、アメリカの絵本

界の著名な人々は、祝福すべきことも多くあった反面、新たな脅威にも直面していました。子どもたちに人気の読み物として、漫画本が新たに登場してきたのです。これらの漫画本は全米の新聞スタンドやたばこ屋に行けば僅か10セントで売られていて、子どもたちが自分のお小遣いで買えました。そして、実際に何百万部も売れました。

当時の図書館員や多くの親たちの視点から見ると、問題は、漫画が子どもたちに文化的、芸術的体験を通じての人生の真実を知らしめる精神の向上をもたらすことがなく、単にセンセーショナルなだけだ、ということでした。しかしながら、何百万人というアメリカの子どもたちは漫画本がなぜか大好きでした。図書館員、教育者、児童文学の権威たちは、文学的な基準と人気とのバランスをどのように取るか、という問題に何十年も取り組みますが、それは漫画本の強力な魅力を表面化させる結果となりました。

一体誰が、どの本が子どものためになると言えるのでしょうか。1941年のコルデコット賞の受賞スピーチで、ロバート・ローソンは専門家たちに向かって、「この未知の分野に歩み出すにあたって、謙虚に振る舞い、開かれた心を持ち続けてほしい」と述べました。ローソンは、図書館員や編集者に向かってこう言いました。「挿絵のどんな細部が、あるいは物語のどんなささいな一言が、子どもの心に火花を飛ばし、その子の一生の間、輝き続けるような大きな光になるか、誰も分からない」。

このときローソンが言った考えを証明するかのように、次の世代になって、子ども時代に大量生産の漫画本やミッキーマウスの映画を土曜日の午後に見続けて育った、独学のブ

ルックリン移民出身のイラストレーターが生まれました。そして過去の素晴らしい児童文学に余り接していなかった人物が、世界中で知られる芸術家になったのです。彼がモーリス・センダック (Maurice Sendak) です。そ

して芸術のかたちとして究極の絵本表現の一つである *Where the wild things are* (かいじゅうたちのいるところ) を描いたのです。

御清聴ありがとうございました。